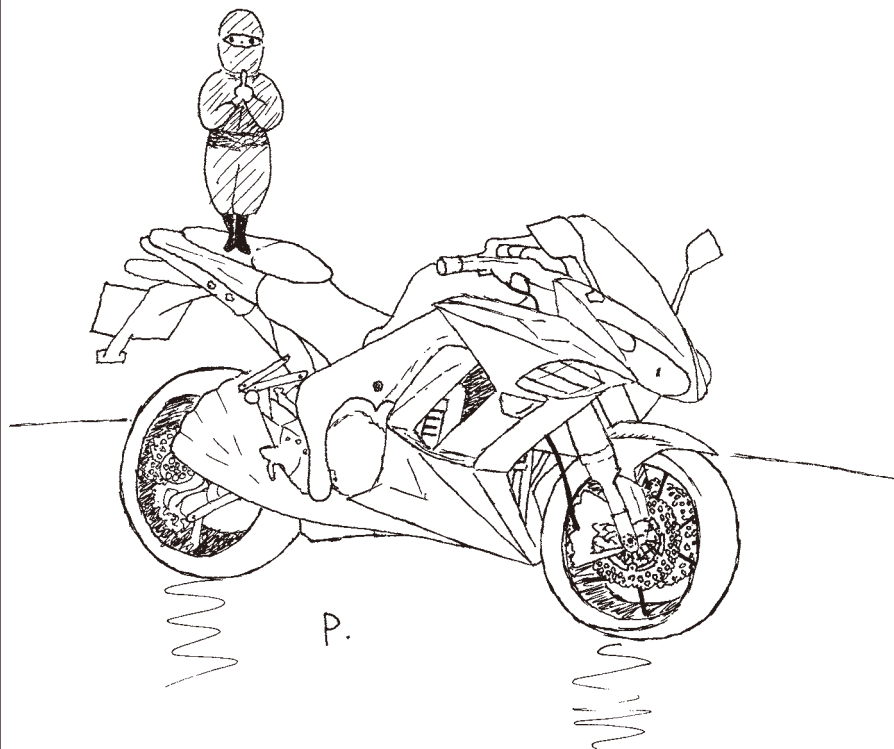




話題の本棚

AI Sweigart著『退屈なことはPythonにやらせよう』

田嶋信雄著『日本陸軍の対ソ謀略 日独防共協定とユーラシア政策』

特集／手紙

新刊コーナー／新書コーナー／最近読んだ本／地政学への誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



UNIV.
CO-OP

京大生協
綴葉編集委員会

人間性のためのプログラミング

退屈ないじょうは Python
にやらせよう

Al Sweigart 著、相川愛三訳
オライリー・ジャパン



退屈なことも我慢してきつちりこなすのがエライという認識は明らかに生得的なものではない。小学校の夏休みを思い返しても、八月最後の一週間までに宿題を終わらせていた人など明らかに少数派ではなかっただろうか。確かに漢字の書き取りは本人がやらないと意味がない。しかし、その感覚を大人になっても忘れずに、雑務と呼ぶべき仕事も真面目にやってしまうのは問題である。それは徒勞としか言いようがない。人間がやらなくても、機械を使えばなんとかなるような仕事は機械に任せるべきではないだろうか。本書はそのためのプログラミングを非プログラマー向けに解説した、非常に親切な入門書である。

雑用のプログラミング

さて、プログラミングによって機械に仕事をさせると聞くと何となく大変そうに感じるかもしれない。そのための準備、例えばソフトウェアの用意やプログラムの書き方の勉強に時間がかかるから、結局自分の手でやったほうが早いのではないかと思う人も多いだろう。しかし、それは練習に時間がかかるから自転車に乗るのをあきらめたほうがよいと言っているようなものである。一度覚えてしまえば、大抵の雑用は自力よりかなり速くこなすことができる。ま

た、雑務の処理程度なら高度なテクニックは必要ないため、覚えるための労力もそれほどではないはずである。

本書ではまず初めの六章を割いてPythonというプログラミング言語の基本的な書き方が解説される。説明は非常に丁寧で分かりやすく、この部分だけでもPython入門書としての価値がある。その後はいよいよPythonを用いて様々な作業を自動で行う方法の解説である。この部分は例えばExcelの処理、電子メールの送信というふうに項目別に分けられており、どちらかといえばレシピー集に近い雰囲気である。紹介されている内容は豊富である。ファイルの操作など、いかにもプログラミングで処理できそうなものから、キーボードやマウスの自動操作のようにちょっと難しそうなものまで解説されている。重要なのはどの場合でも出来合いのものを用いて解決されるということである。一から千まで自力で作らず、既存のライブラリ、すなわち他の人が書いてくれたプログラムを組み合わせて雑務を処理してゆく。練習問題も用意されているので、本当に必要なときに対応できる実力が養成できるだろう。

プログラミングをはじめよう

昨今、高度な人工知能により人間の仕事が奪われることが危惧されているが、世の中には機械にぜひ奪ってほしい仕事というものも存在する。本書で扱われる課題はそのよい例だろう。退屈な仕事は機械に任せて、人間は人間らしい仕事をしようではないか。そのために、簡単なプログラミングを始めてみてはいかがだろうか。本書がよい手引きになってくれるはずである。

(藤餅)

(六一六頁 税込三九九六円 6月刊)

アフガニスタンに散った「防共」の夢

日本陸軍の対ソ謀略

日独防共協定とユーラシア政策

田嶋信雄著
吉川弘文館



年頃の男子は須らく近代の日本やドイツに「偏った」興味を持つのではないかと密かに思っている。評者も一〇代の頃、偶然関岡英之著『帝國陸軍 見果てぬ「防共回廊」』（祥伝社）を読み、ユーラシア大陸を股にかけた雄大な戦略に心躍らせた。しかるに、関岡も含めてこういう文脈で「ユーラシア」が絡むと詳しいのは非専門家が多く、この分野が好事家とコンビニ二本の世界だと思っているのは評者ばかりではないはずだ。

本書は日独伊三国同盟（昭和一五年）の下敷きになった昭和一年の日独防共協定の意義を対ソ共同戦線としてのユーラシア戦略から捉えなおす一般書体裁の専門研究である。著者の田嶋は独中関係の権威で『ナチズム極東戦略』（講談社選書メチエ）で名をはせた。しかし、著者は「日本史家」ではなく、本書は著者曰く「地雷原を行軍する」覚悟での異分野への参戦である。

本を開くと目を瞞るのは著者のカバールする地域と年代幅の広さである。ドイツ専門家らしく叙述はヴィルヘルム二世の黄禍論と日本側の三国干渉・独露提携への警戒感から始まる。第一次大戦ではドイツは日本を含む連合国の植民地に独立工作を行い、その過程で英露のグレートゲームの舞台アフガニスタンや、日本の金城湯池満州

までもが工作対象となる。そんな中ドイツの東漸にいち早く目を付けたのは「祭政一致」で悪名高いあの人だった。日本もシベリア出兵を経て内陸アジアへの注目は高まり戦史編纂で有名な谷寿夫や陰謀家橋本欣五郎らも動き出す。イスラム世界へのトルコの影響力やソ連対策としての日本・ポーランドの提携など戦間期の国際関係を丹念に拾いつつ、叙述は三〇年代へと進む。

満州国建国後、広田弘毅主導の「防共外交」が進展し、さらに第三帝国建国後のドイツでは旧敵国の日本を対ソ連で共闘する盟邦とする読み替えが行われた。しかし「防共」をグローバルに拡張することは出来ず、日独提携の焦点は地政学的な要衝のアフガンを友好国とし、日独（独満）航空便を就航させることにつながる。しかし日中戦争により中国本土が戦闘空域化する中、アフガニスタンから日本の駐在武官が追放され、日独直接提携は画餅に帰した。三国同盟どころか独ソ不可侵条約以前に日独提携が破綻していたという結論は東大の酒井哲哉が言うような「防共という言説」に牽引された戦間期外交の失われた環を間違ひなく提示できている。

前述の通り著者は練達の研究者だが、あとがきに見せる気負いはすさまじい。「日本政治外交史の正統的な学問著作」を「吉川弘文館」で出版することを目標とする人は多いだろうが、有言実行する人は初めて見た。ただそれは皮相上滑りではなく、本書のテーマが「学問」として如何に回避されてきたのかの証左なのだろう。本年も田嶋らによりドイツのアジア政策の専門書が出版されているが、このような「危ない」テーマの次作も鶴望したい。（投稿・とつこ）

（二〇一頁 税込三〇二四円 3月刊）

錦繡

宮本輝著
新潮文庫

もし恋に美しい別れ方があるとしたら、それはどんな物語だろうか。互いを尊敬し、未来を祈り、しかしもう二度と交わることのない運命を受け入れる。そんな別れが出来る男女はどういう心境なのだろうか。



本書は日本を代表する書簡体小説であり、全編が二人の手紙のやり取りから構成されている。電話が普及し手紙が衰退する中で、それでも著者が書簡体小説に拘ったのは、手紙でしか表現されない言葉があるからだ。

それこそが別れた男女の言葉であった。一人の人間のために伝える、悔恨と哀愁。幸福だった生活が終わり、十年の時を経て送り合う往復書簡。事故を切っ掛けに二人は別れ、女は再婚し、男はヒモになった。直接会うことでは表現できない言葉が、二人に手紙を書かせた。過去に囚われて前に進めない双方が、手紙を通してゆっくりと未来に目を向けていく。あの時言えなかった言葉を、流れてきた歳月を、そして自分が今どこにいるのかを、二人は手紙に綴っていく。そこには行き場のなかった言葉が、時を経てようやく互いに届いていく様子が描かれている。

別れの物語と聞いた時、読者は寂寥感を抱くかもしれない。しかし本書を一読して思うのは、青春小説とは違った意味での清爽感だ。悲しさや物寂しさはあるけれど、愛するということを出会いの美しさだけでなく、別れの美しさにも見出せる本書は不思議と読後に光明を示してくれる。二人は愛がないから別れるのではない、愛があるから別れるのだ。失恋の傷を持つ人へ、鴨川の片隅で風に揺られながら淡い恋愛物語を読んでみてはいかがだろうか。

(きもの)

(270頁 税込529円)

〈特集〉

手紙

暑中お見舞い申し上げます。休みの間いかがお過ごしでしょうか。最近ではメールやLINEで連絡を取ることがほとんどで手紙など書かないという人も多いと聞きます。これを読んでいる貴方は手紙派・メール派どちらなのでしょう。といっても手紙というものは読んでくれる相手がいなければ始まらないもの、ということではまず評者の選んだ「手紙」たちを読んで下さいませ。御返事は読者カードで、一枚綴って頂ければ幸いに存じます。体調にはくれぐれもお気をつけて。敬具。

(ねこ)



ホフマンスタール詩集

ホフマンスタール著 川村二郎訳
岩波書店

ある日、好きなアーティストのライブを見に行き大いに楽しんだ。しかし後日、そのライブの素晴らしさを友人に語ろうとしても、それはいく回言葉を重ねても——もしくは重ねれば重ねるほど——言い尽くせず「何か違う」……例えばそんな経験をしたことは誰しもあるだろう。ライブ中に感じた没入感を、後に言葉で表そうとしても無力感に襲われてしまう。

こうした言葉と言葉によって表されるものとの間の乖離は、上の場合のように主観的な感情を言い表そうとする時は起こりやすそうに思える。しかしもしこの乖離が、例えば身の回りにある客観的なものを言い表そうとする時にも起こってしまったら？ 目の前の赤く丸い果物を「りんご」と呼べない、またはそう呼びきれない何かが残ってしまうなら？ 言葉を以てして何かを言い表すこと自体が不可能にならないかと思えてくる。

本書に付録されている短編『チャンドス卿の手紙』は、そんな言語の表現不可能性に直面し文学活動を続けられなくなった詩人チャンドスの記した弁明の書という体裁をとった作品だ。以前までは、身の回りのもの（世界）に対してライブの例で記したような一体感を覚えていたチャンドスだが、ある日からそうした一体感は失せてしまう。そして世界は言葉で名付けることができない、余所余所しく不気味なものの集合として彼を圧倒し、絶望へと追い込む。その絶望の中、詩人はどのような希望を見出すのか。言語の表現不可能性を言語で表現し、何とかして言語に希望を見出そうとする詩人の切迫しつつ逆説的な試みは、私たちにも言語そのものを捉えなおす契機を与えてくれるだろう。（二コ）

（391頁 税込713円）



Xへの手紙・私小説論

小林秀雄著
新潮文庫

《女は俺の成熟する場所だった。書物に傍点をほどこしてはこの世を理解して行こうとした俺の小癪な夢を一挙に破ってくれた。》《言うまでもなく俺は自殺のまわりをうろついていた。》《君は解るか、余計者もこの世に断じて生きねばならぬ。》《俺は別に君を尊敬してはいない、君が好きだというだけで俺にはもう十分に複雑である。》

「様々なる意匠」で批評界に登場して3年目の1932年、30歳の小林秀雄が「君」に宛てて書いたのが、本書に収められた30頁あまりの「Xへの手紙」である。批評、告白小説、随筆のいずれとも決めがたいこのテキストには、批評の神様でも、ましてや入試の死神でもない、生身の人間の強烈な煩悶の痕跡がある。恋愛、言語、歴史、政治、思想について、彼の言葉が溢れ出し、ことごとく箴言となる。私は、かくも一語一語が精読に堪える文章を他に知らない。というより、かくも精読を求める表情をした文章を他に知らない。面と向かっては言えない心情を吐露させる魔力を持った媒体としての手紙、その極めつけの特異な力がここに現れているように思われるのだ。

一生涯の可能性と不可能性の全てを蔵した若き日の一作、という幻めいたものがあるとすれば、小林秀雄にとってのそれは間違いなくこの手紙であろう。彼のことを知らない人も、嫌悪する人も、敬遠する人も、熱愛する人も、ぜひ（何度でも）読んでほしい。Xとは、未来の全ての人々だと私は信じるから。《俺のような人間にも語りたい一つの事聞いて欲しい—人の友は入用なのだという事を信じたまえ。—これは俺の手紙の結論だ。》

（春海）

（391頁 税込637円）



ルソー・コレクション 文明

ジャン＝ジャック・ルソー著
白水社

地震が稀有なヨーロッパ世界にとって 1755 年のリスボン大地震は思想においても地殻変動をもたらした。その具体例としてしばしば挙げられるのが、ヴォルテールの文学作品である『リスボンの災害についての詩』と『カンディード』だ。ヴォルテールはそれらに、従来の思潮であったライプニッツ＝ポプ流の「この現実の世界はあらゆる可能な世界のうちで最善の世界である」という楽天主義＝最善説（オプティミズム）への激烈な揶揄を込めた。それに比べると、ヴォルテールの知人でもあったルソーが本書所収の「ヴォルテール氏への手紙」でヴォルテールに反論し、オプティミズムを擁護したことはあまり知られていないかもしれない。

ヴォルテールは地震の被害という不幸あるいは悪を不条理として受けとめて嘆き悲しみ、神の摂理による合理化を拒んだ。それに対してルソーは不幸の原因を人間社会に見出す。「自然のほうからすれば、なにもそこに 7 階や 8 階建の家を 2 万軒も集中させることはまったくなかった」という指摘は、一貫して自然と文明の関係について問うてきた哲学者であるルソーの面目躍如たるところだろう。神への信仰とこの被造世界へのオプティミズムは、ルソーに慰めと希望と、人間に由来する悪を直視する強さを与えたのである。

ルソーの手紙は時空を超えて、この地震頻発列島に生きる私たちへも宛てられている。たとえば、1 度目の地震の直後に速く避難しなかった人々の多くがそのせいで後に命を失い、さらには命の価値を自ら貶めた、という辛辣な批判に対して、私たちはいかに応答できるだろうか。

（壺人）

（317 頁 税込 3240 円）

肉筆で読む作家の手紙

青木正美著
本の雑誌社

手紙を書くのが大変、とか何を書けばよいかわからない、という悩みをよく聞く。書く相手の顔を思い浮かべ、何をどのように書くか推敲する。それは本を書くのにも似た作業である。それでは作家たちはどのような手紙を書いていたのだろう。そんな疑問を持った時には本書を読むとよいかもしれない。

本書には明治～昭和の文豪たちの書簡がエピソードとともに収められている。夏目漱石の愚痴の手紙、倉田百三の恋文、宮沢賢治の売り込み状、志賀直哉の作品評など様々な手紙があり、その多くはあまり知られていないものだそう。 「肉筆」ということで、カラーページに手紙の写真も載せられている。

それらの文面を見るに、文章は作家のものらしく達筆だが、面白いのは手紙の写しから見て取れる字体の特徴である。なかなか読みにくく、また塗り潰して消したり、余白に修正の書き込みをしたりして試行錯誤の跡が伺える。作家たちも手紙を書くのに苦勞していたのではなかろうか。手紙には書く人の人柄が滲み出るといふ。本書に載せられた手紙からは作家本人の人間臭さのようなものが読み取れる。

一方、本書では作家の手紙を集めようとする人々の、醜さともいえるような人間臭さも垣間見える。著者は古書店経営の傍ら、それら作家の手紙を蒐集していた。掲載されている手紙の中にはオークションで落札したものもあり、また著者自身も所蔵の手紙を蒐集家に売却したと語る。そしてオークション中の蒐集家同士の静いのエピソードも語られている。その点で本書は、手紙を巡る「物語」と言っても過言ではないだろう。

（ねこ）

（296 頁 税込 2160 円）



新刊コーナー

夢見る少年の昼と夜

小学館P+D BOOKS
福永武彦著



「純文学」と聞くと、私はいつも福永武彦のことを想う。限りなく繊細で、理的で、生真面目で、それでいて時に大胆で、実験的な昭和の作家。新潮社版の全集の帯に「孤独と愛と死と藝術を凝視しつづけた」と謳われているのだが、こうした文句が全く誇張とも滑稽とも感じられぬような作家。中期の一四の短編を選んだ本書は、そんな福永の世界に出会うための絶好の入口となる。

表題作「夢見る少年の昼と夜」は、ある小学生の空想の世界を素直な文体で描いた作品だ。少年は、鳩時計のささずりに合わせて、おまじないをする。「愛ちゃん二会イタイ……」彼はまた、ギリシア神話を読むおませで、周りの大人たちを密かに神話の登場人物に擬してもいる。だが、そんな彼の夢見は、単に無邪気で明るいただけではなく、人間の暗

い部分に行き当たるものでもあった。緑日の深夜、愛ちゃんに会いに出かけた少年は……。その底に深淵を湛えた人間の内面、それは福永の諸作を貫く第一の主題に他ならない。

その他、キリスト者としての作家の顔が見られる「心の中を流れる河」や北国の抒情と虚無を描く「世界の終り」、「今昔物語集」の翻案ものである「鬼」などを収める。

ところで、福永は、加田伶太郎の筆名で探偵小説を、船田学の筆名で小説を書いてもいる。興味のある向きには、本書と同じ小学館のレーベルから五月に出版された『加田伶太郎作品集』もお薦めする。

(四九六頁 税込七〇二元 4月刊) (春海)

声をかける

高石宏輔著
晶文社



はじめて会う他人からどう見られているのか、ふと考えてみる。学歴もなく身分もない匿名の人間として他者の前に立った時、あなたはどんな印象を与えるのだろうか。街ゆく

雑踏の中で、それでも認めてくれる他者を望むなら、この本を読んでみるといい。

ナンパ師でカウンスラーである著者が書く初めての小説。自信がなくて内省的な主人公が、自分自身を変えたくて、声をかける。友達になりたいわけでもセックスに持ち込みたわけでもない。自らが他人にどう反応されるかが知りたくて、彼は女性を誘う。他人を知り合いに変えていける技術、無数のすれ違いを出会いに変える力さえあれば、彼は変われると思っていた。しかしいくら出合いを重ねても同じような欠落を抱えた女性としか出会えず、彼の心は満たされなかった。

彼は徐々にナンパがうまくなっていくが、寂しさは紛れない。「誰もあなたのお母さんになれないの。」一夜を共にした女性の言葉が脳裏に響く。菩薩のように自分を許し、母親のように包んでくれる人が欲しかった。しかし寂しさから生まれた必然性のない繋がりには、寂寥の中でしか成り立たず、幸せになったら崩壊する関係だった。本作品は大人になってしまった人間の優さと、それへのがきが描かれている。孤独を埋め合わせるために、他人を利用してはならない。しかし分かっているも他人を求める彼の葛藤は、大人になりきれなかった大人たちの青春の憐憫なのかもしれない。(きもの)

(四一七頁 税込二八三六円 7月刊)

デカメロン 上中下

ボツカッチヨ著 平川祐弘訳

河出文庫

社会が緊張する

と性表現への規制が厳しくなる。女性はある限り露出を避け、エッチ



な漫画には苦情が殺到し、青少年に無害な芸術作品だけが奨励される。抑圧的な社会は人間の余裕を否定する。そんな時は、世界的名作『デカメロン』を読んでみては如何。

一四世紀に書かれ、イタリヤ文学を代表し誰もが題名を知っている本書。古典といえは堅苦しいイメージになりがちであるが、本書はユーモアあふれる喜劇・悲劇の中で、人間的欲望の解放が現れている。

舞台は一四世紀のフィレンツェ。黒死病が流行し恐怖に慄く市中から脱出した男女二〇名が時間つぶしに二人一話の物語を話すという構成だ。一〇日間で百物語になる本書は、冒険物語や因果応報のもの、数ページの短編から重厚な長編など多様な物語が収録されている。物語の内容は近代に生きている我々からは想像を絶する展開が多い。ボッティチェリ

が描き本書の表紙ともなった第五日第八話は二頭の犬に惨殺される女性を見ることで、結婚を決意する女性の不思議な物語である。また第五日第一〇話は性交渉をしない夫婦が浮気をし、美少年をとりあうという奇想天外な落ちである。

読んでみると一つ一つの物語に笑ったり顔をしかめたりする男女の光景が目につく。たとえ時代が混迷を迎えても、人間は笑顔でいたいことに変わりはない。最近余裕が足りない人へ、鴨川デルタで僕らの百物語を作ってみませんか。

(税込各一〇八〇円 4月刊)

(きもの)

ハイファに戻って／太陽の男たち

ガッサン・カナファニー著

河出文庫



著者は、未だ現代の抱える歪みを一身で象徴するパレスチナに、一九四〇年代末に生まれた現代アラビア語文学の要の一人で、ジャーナリストでもある。その影響力の強さから、三〇代半ばの若さで殺害された彼の邦訳選集

が今回、単行本としての復刊を経て文庫になった。

表題となっている「太陽の男たち」は、イラクからクウェートへ密入国を図った四人の男たちを描く中編である。その背景のもつ重みのそれ以上に、それぞれの男たちの過去とその結末が、非常に大きな力をもって迫ってくる。「ハイファに戻って」では、シオニズムの嵐吹き荒れるハイファから子を残し逃げ出した夫婦を介し、「故郷」を失ったアラブ人の姿を映し出す。

現代アラビア文学の要の名に違わず、背景となっている社会的な問題に対して、その筆致が十分に肉薄している。作中における人々の発言は、著者自身の言葉であるとともに当事者のもつ言葉でもあるだろう。故郷を失った人々の悲哀、傷つけられた誇り、そして失われたものへの郷愁が、情景描写にすらこびりつくようだった。

物語には日本国内で復刊されるのにはそれなりの理由があったのだろうが、文庫という媒体で本書を手にとることができることを歓迎するべきだ。このような物語に触れることが、報道には持つことの難しい、当事者の見る景色のみ含まれる心象に接近できる、類稀な機会なのだから。

(二九二頁 税込九五〇円 6月刊)

(トロ)

百年の散歩

多和田葉子著
新潮社

「散歩の際に、空間的にも時間的にもはるか遠くのもの、いかに今の風景と瞬間のなかに侵入してくるかは周知の通りだ」。九〇

年ほど前にそう記したのは思想家ベンヤミンであった。本書は、カント通りやカール・マルクス通りなどベルリンに実在する通りの名を題名に冠した一〇篇からなる短編集だ。その一〇篇は、筆者自身が一人の散歩者として描いた街のスケッチであり、ベンヤミンが記したような、時空を超える伸びやかな想像力に溢れている。まさに「百年の散歩」である。

そんな筆者の文学的散歩は何気ないものの描写から始まる。通りにある看板、区役所の壁、店先に並んだ花……それらからなる当たり前の日常に、筆者は言語遊戯によって裂け目を入れていく。喫茶店が「奇異茶店」になれば、スカートは「米寿」色になるし、私たちは「藍フォン」を手放さない。筆者は相異なるイメージや言葉をつなぎ合わせる。そし

てその結東点において、つまり言語と言語の間においてたゆたうことで日常を解体し、私たちの持ち合わせている言語感覚を捉えなおしてゆく。そのように絶えず揺れ動く視線は散歩者のそれに他ならない。そしてその視線が、冷戦時に東西に分割された都市であるベルリンの歴史、いや「轢死」に向き合う時、単なる言葉遊びの域を超えて、私たちの生活感覚全体が揺さぶられる。

周りのものが普段見せない様相を、散歩者の目は捉える。ぶらついていればそんな新鮮な出会いが自然と訪れるはずだ。(二二)

(二四六頁 税込一八三六円 3月刊)

三木清大学論集

大澤聡編
講談社文芸文庫

今年三月の卒業式で山極総長は京都大学には「対話を根幹とした自由の学風」の伝統があると云った。このような学風に憧れて京大を志した読者も多いだろう。しかし「自由」とは何の自由であるのか、その根幹にあると

される「対話」とは何だろうか、そもそも大学や学問とはどのようなものであるのか。

哲学者三木清の大学・学問に関する著作を集めた本書はこのような問題を真剣に考える上で意義深い。真理の探究のために大学では研究の自由が認められる必要があるが、それは研究の共同と共にあって初めて意味を持つのであり、総合大学の存在する意義もそこにあると三木は言う。真理の探究という使命故に理論的・科学的精神を求められる大学は、社会との隔絶や非現実性を非難されがちであるが、この精神は国策や技術と対立するものではなく、むしろ両者の弁証法的統合こそが大学に求められる。これは社会との没交渉と技術軽視のきらいのある人文主義とも異なり、三木はその時代の現実的問題を出発点とすることをなによりも重視する。本書では、大学、学問、理論、科学、制度、教育、学生等についての当時の問題を通して三木の論が展開され、彼の大学・学問観が明らかにされる。

一九四五年に没するまであの激動の時代を生き、戦後世界を見ることになかった三木であるが、彼の論は驚くほど現実味を持って二〇一七年を生きる我々に訴えてくる。学生として、京大生として、大学や学問について一度深く考えてみてはどうだろうか。(カイ)

(二二〇頁 税込一七二八円 4月刊)

いまさらエントロピー？

杉本大一郎著 バリティ編集委員会
(大槻義彦責任編集編
丸善出版



エントロピーという単語の意味は知らなくとも、どこかで耳にしたことのある人も多いだろう。あるときは乱雑さ、またあるときは情報の量の尺度として語られるこの概念だが、その源泉は熱力学にある。この文脈でのエントロピーにはさほど哲学的な響きはない。例えば、よく聞くエントロピー増大則も、低温の物体から熱を取り出し、それよりも高温の物体を温めることはタダではできないという内容を言い換えたものに過ぎない。確かに直感的にはわかりにくい量だが、知っている人にとっては「いまさら」といった感じは否めない。

しかし、それは平衡状態、すなわち「巨視的な変化がない状態を相手にしているからである。変化が起こっている非平衡状態を考える場合はそれほど単純ではない。そのことを実感できるのが本書である。百ページ程度の小著であるが、内容は非常に豊富だ。平衡熱力

学でのエントロピーの復習から始まり、非平衡状態でのエントロピーの生成の議論に入っ
てゆく。更には時間スケールの議論や重力の存在下での平衡状態の安定性などのトピックが簡潔に紹介される。決して初心者向きのやさしい本という訳ではないが、熱力学と統計力学の知識があれば読み進めることができるはずである。

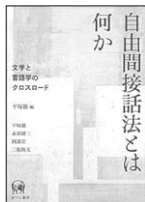
総じて熱力学におけるエントロピーという概念の深淵を垣間見せる一冊である。エントロピーと聞いて、「いまさら」と思える人なら相当て得るところがあるだろう。(藤餅)

(一一〇頁 税込二六二〇円 5月刊)

自由間接話法とは何か

平塚徹編
ひつじ書房

「自由間接話法」
—この言葉からして
てわかりにくそう
な響きである。本
書のタイトルを読
むとそれがそのまま疑問として心に浮かびそ
うにもなる。しかし名前を聞いたことがなく
とも、これは読書好き、特に小説を読むのが



好きな人にとってはよく出会うものなのだ。まずは名称を覚えてほしい。
小説の文章中では登場人物のせりふが力ギ
カッコに入っていたり、その心理が地の文、
つまり力ギカッコに入っていない文に「○○
はくと思った」というように書かれていたり
する。それらは話法と呼ばれる小説の書き方
の一種である。その中で、地の文において
「○○は思った」という語り手の説明なしに
心理が独自のような形で書かれる部分、それ
を自由間接話法と呼ぶ。さて、その部分は一
体誰の視点から見て把握され描写された心理
なのか？ 語りの主語が「私」で進んでいく
一人称小説の場合と、三人称小説の場合では
話法の動きに違いがあるのか？ 本書では豊
富な文例を示しつつ研究者たちがこの問題に
取り組んでいく。しかし、終わりのない推理
小説のように、自由間接話法の仕組みと動き
の謎解きは纏れて曖昧になっていく。その曖
昧さこそが小説世界の奥深さを作るともいえ
るのかもしれない。

小説を読む際にはストーリーや登場人物の
心理など描かれている世界の中の様子に注目
してしまいがちだが、それを表現している描
写の仕方に注意を向けるのも面白いのではな
いだろうか。難解だが御一読あれ。(ねこ)

(一二二頁 税込三四五六円 2月刊)

スマートグリッド・エコノミクス

ファイルド実験・行動経済学・ビッグ

データが拓くエビデンス政策

依田高典・田中誠伊藤公一朗著 有斐閣

かつて、国際機

関から日本の社会

科学が政策にほと

んど役立っていな

いと批判されたこ

とがあった。そして、その当時、社会科学が

活用されていると持て囃された事例である某

国では、科学的根拠を露骨に軽視する指導者

が誕生している。そのような時だからこそ、

政策に活用されるべきエビデンスが提供され

る必要があるだろう。そのエビデンスを得る

ための手段として本書が提示するのが実験・

行動経済学・ビッグデータの知見である。

著者らは、我が国で初めてとなる大規模な

ワールド実験を行い、いかなる政策が効果

的であるかを明らかにした。その内容は本書

で確認していただきたいが、精緻な実験デザ

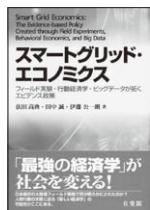
インに裏打ちされたエビデンスは、今後の政

策策定において活用されるべき重要な知見で

あると言えるだろう。また、本書で示されて

いる事例から垣間見える人間の性分も実に興

味深いものばかりである。



先の批判から三〇年以上が経過し、未だに状況は改善していないという見方もある。むしろ、世界的に見れば状況は悪化しているかもしれない。科学的根拠よりも「感情」が重視され、「ポスト真実」なる言葉が躍るような時代。そんな中にある、真摯な科学的姿勢が社会をよくするという力強い希望が示された本書が世に出た意義は大きい。経済学者による著作ではあるが、内容は「人間」の行動変容を科学的に解明するというものである。文理問わず、幅広い読者に読まれるべき一冊である。

(二二二頁 税込三〇二四円 5月刊) (投稿・郵池)

シュタイナー 根源的霊性論

バガヴァッドギターとパウロの書簡

ルドルフ・シュタイナー著

高橋巖訳 春秋社

本書はルドルフ・シュタイナー

がまさに人智学協会を立ち上げた時期である一九二

年末から翌年にかけて行った五日間にわたる連続講義の記録である。講義では古代イン

ドの哲学詩『バガヴァッド・ギター』と



『パウロ書簡』を比較し、人智学のもとに両者を総合することが試みられている。

『バガヴァッド・ギター』はウェーダーとサンキヤ哲学、ヨーガという古代インドにおける三つの精神潮流の有機的統一として捉えられる。そしてシュタイナーは驚くべき大胆さで、各思想をキリスト教に結びつけて解釈していく。たとえばウェーダーにおける創造のコトバはロゴス・キリストに、サンキヤ哲学における存在の形態の合法則性はユダヤの律法に、ヨーガにおける霊への敬虔な帰依はキリストの復活への信仰に、それぞれ対応するというのである。

無論、両者の間に横たわる差異も見逃されない。一方でウェーダーによれば、外界の物質はマヤー（幻影）である。他方でキリスト教の神は創造主として被造物を肯定したとされる。シュタイナーはマヤーをルシファーに誘惑される人間の魂の条件とすることで両者を総合し、人間としての謙虚さと自己認識を人智学の理想として掲げるのである。

シュタイナー独特のオカルトな歴史観や霊性進化論、「二人のイエス」説などをどのように受けとめるか、という厄介な問題はあるものの、それらを括弧に入れても興味深く読める刺激的な思想書である。(霊人)

(二二〇頁 税込二七〇〇円 4月刊)

死者と苦しみの宗教哲学

宗教哲学の現代的可能性

佐藤啓介著

晃洋書房

キリスト教など

の実定宗教がその効力を日々、失っているような実感はどんな人でもあ



るだろう。いわゆる宗教の世俗化である。しかし世俗化を経た後でも、我々には宗教と言えるかわからないような宗教的なものが残って、経験しているのではないか。著者が言う、悪・死者・苦しみという経験である。

まず著者は悪というものには自らがそれをなすということの他に悪を被るという経験もあると言う。他人に悪いことをされたりして憎しみや恨みのゆえに復讐をしたり、逆にその相手を救ったりする。そのどちらしようもない煩悶はまさに宗教的救済が求められる経験である。また我々は大多数の人々を吊った碑などで死者に出会いうる。それはつまり、死者が地縛霊などのように限定された場所しか出会いは存在しないことだ。しかし著者は災害や事故などが我々の身近で起こるように、我々は非限定的にいつでも死者に出会

いうのではないかと主張する。そして、苦しみは自らの不幸や悲しみを嘆く経験である。しかし著者がいわくそのような苦しみを受け入れきれないときが必ずある。なぜこの私が、というやりようのない抗議の声である。最終的には神をも含めた誰にも向けようのない抗議でもある。その経験は伝統的宗教が逃していた宗教的なものである。

8月にはお盆などがあり、我々が宗教的なものに出会う機会は目白押しである。そんなときに本書を読んだらいつもと違う8月を過ごせるようになるのでは。(つうりつ)

(二二二頁 税込三三三円 4月刊)

デカルト医学論集

ルネ・デカルト
法政大学出版

コギトを第一原理とする世界認識・直交座標及び

数式の表記法の構築・ユートルの渦



を動力とする宇宙論など、もはや人口に膾炙した理論に加え、デカルトは医学にも精通し、一七世紀という西洋医学の過渡期において、

数編の医学論を遺した。

ガレノスの医学体系・ウェサリウスの解剖図版・ボアンの解剖学書・ハーウィの血液循環論など、オーソライズされた古典文献から当時の最新医学論までをクリティカルに読解することによって医学の基本的足場を構成したデカルトは、同時に解剖学書の記述の真偽を検証するために書物から距離を取り、牛・羊・鳥などの動物を自らの手で実際に解剖し、諸器官の配置及び脳や心臓の作動メカニズムを自らの眼で精緻に掌握することに心血を注いだ。そうした探求は彼の機械論的世界観に結実していくものであった。形而上学を構成するところのペンを形而下の事物を分析するところのメスに持ち替えることで、一時的に身体という視座から真理に接触することに切り替えたと思いきデカルトにとって、医学は哲学上の方法の一つであったのだろう。

全知への情熱を以て自由に境界線を跨ぎ、あちこちに確かな足跡を残していく知的身軽さと天才性を改めて考え、人間デカルトの思考のタイプは、現代においてもなおオカルスマ性に溢れていると感じた。読了後、『方法序説』をバイブルにしていた十数年前の自分を思い出し、数日間デカルト著作集を読み耽ってしまった。デカルトは偉大だ。(投稿・雲)

(二二七頁 税込五一八四円 3月刊)

現代思想の名著30

仲正昌樹著
ちくま新書

一九八〇年代から九〇年代にかけて、哲学を含む人文科学全体に大きな影響を与えた思潮があった。それが「ポストモダン思想」でありまたの名を「現代思想」と言った。本書はその概説書である。まず筆者は現代思想を「デカルトに始まる、主体や自我を中心に備えた近代哲学の枠組みを解体する思考の系譜」と定義する。そしてそれを、構造主義、現象学、文化的他者論など六つのグループに分類し、各グループで五人の有名な哲学者を取り上げ、一人につき二冊の代表作を選んでその概要をまとめている。本書は極めて平易な語り口で書かれ、その記述も要点をついており、私のような初学者には最適だろう。

だがこういった概説書を読む上でより大切なのは、それから学んだことを自身の思考に応用したり、それを取っ掛かりにして原典へチャレンジすることなど、主体的な更なる学びへとつなげてゆくことだろう。その意味で、哲学という広大かつ豊饒な知の大海に帆を広げ漕ぎ出です上で、本書は優れた海図になるはずだ。

(二八六頁 税込九五〇円 6月刊)

(投稿・はむ)

未来の年表

人口減少日本でこれから起きること
河合雅司著 講談社現代新書

日本でこれから起こる少子高齢化による人口減少の問題は、いったいどうなるのかと具体的に考えたことはあるだろうか。その避けようのない問題の現実を具体的に年表にまでしてつづけてくれるのが本書である。

少子高齢化への対策が様々行われているが、この現象を完全に止めることは不可能である。本書に示されている未来の年表は運命的に起こる現実である。例えば、二〇四二年には高齢者人口が約四千万人に到達し、今より勤労世代が千二百万人減る。日本では僅か三〇年以内にこのような歪な社会が実現することが見込まれる。

だが、本書の肝はそのような暗い未来への対策を立てることだ。それは「戦略的に縮む」ということであり、働き手不足解消のために二四時間営業をやめるなどといった拡大路線を捨てることである。少子高齢化は確実に起こっているのだからそれに対処するにはこうする他ない。現実から目を逸らさずにこの状況を憂い、未来を担わなければならない人たちに本書を薦めたい。

(二〇八頁 税込八二二円 6月刊)

(ついで)

隕石

迷信と驚嘆から宇宙化学へ
マテュー・シネル著 白水社文庫クセジュ

ヒトの歴史の中で、隕石はどのように捉えられてきたのだろうか。本書は、隕石の宇宙科学における重要性、そのもたらした学術的進歩だけでなく、古代から近代に亘る隕石解の歴史にも触れた概略書だ。

科学的側面からは、必要な知識の紹介に始まり、隕石の分類、宇宙からの飛来に際する物理学の現象への言及、貴重な宇宙からのサンプルとしての隕石とそこから解明された事実などが述べられる。現在も進行し続けている太陽系生成の過程に隕石からの知見がどのように活用されてきたのかについて、大まかな知識が得られるだろう。

また、隕石という非常に特異的な現象がどのように解釈され、現在のような理解に至ったのかを述べた二章の存在が本書の特徴かもしれない。アリストテレス、プリニウスなど錚々たる名が並ぶ。西洋では一八世紀末に至るまで宇宙からの飛来が信じられていなかったという点も非常に印象的だ。もし隕石の飛来を目撃したら、僕達はどう振る舞うべきなのか、本書を読んで学ぼう。

(一四七頁 税込二二九六円 5月刊)

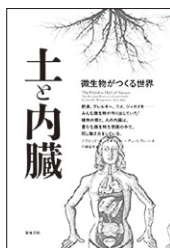
(トロ)

生命の自然の微生物的ルーツ

土と内臓

微生物がつくる世界

デイビッド・モントゴメリー、
アン・ビフレイ著 片岡夏実訳
築地書館



《人間界と植物界は共通する主題を持つ——微生物との活発な伝達と交流だ》《微生物が土壌の健康と人間の健康の両方に果たすきわめて重要な役割が明らかになった今……》《私たちは、生態学者の精神、園芸家の気配り、医師の技術をあわせ持つ必要がある》。《はっきり言って、現代の農業と医療の中心にある慣行は多くが完全に道を誤っている》。

原題は、「自然の隠れた半分——生命と健康の微生物的由来」。本書の話題がまたがる分野は多岐にわたる。農学、地質学、土壌生態学、医学、そしてもちろん、微生物学。しかしいずれにせよ、あらゆる人が読むべきであり且つ読めば必ず利がある、そう簡単には見つかからない本の一冊であるという点については請け合える。

副題にもあるように、また以前紹介した『あなたの体は9割が細菌』（河出書房新社、本誌No.353）におけるのと同じく、本書の主役は、微生物とその生態圏（しかし本書では土壌の、そして内臓の）である。ヒトゲノムプロジェクト以降の微生物学は、人間身体の栄養摂取機能や免疫系が、それぞれに独自のゲノムを持った数百万種もの共生微生物との複雑で密接な協力関係のなかで漸く調子を保っていることを明らかにした。我々の生命や自然についての従来

の理解そのものが、根底から問い直されつつある。最近ではこの分野の一般書も相次いで出版・翻訳されており、本書もその流れの中にある。著者夫婦の専門が地球科学と環境生物学であることは、一見本書の不利点に思われるかもしれない。しかし邦題にも反映されている本書の射程の大きさと一般書としての価値は、まさにそのように別の分野の専門家が独特の（文明史的規模の？）視点から微生物学と土壌生態学の展開と成果を博搜して架橋し、物語のように読み易い調子で語りおろしてくれている点に由来する。

根と腸——微生物との繋がりにおけるこの両者の連関が本書の中心テーマである。この選択は恣意的なものではない。我々の生存に欠かせない腸内細菌の餌となる植物は、主に根を介した土壌中の様々な細菌の協力を得てはじめて栄養豊富に育つことができる。土壌はいわば植物の腸であり、植物の健康はこの「根圏」の微生物生態系の豊かさに懸かっているのだ。土壌にどれほど化学肥料を施しても、微生物による保護がなければ植物は病原菌耐性が弱く、また栄養価も低いま育ってしまう。弱い作物を守るために新たに農薬が必要になり、それがますます土壌を「死なせて」しまふという悪循環が、現代の農業を蝕んでいると著者は指摘する。そして同じような微生物生態系の軽視は、医療にも共通しているものである。植物にせよ人間にせよ、生命は個体では生きられないのだ。

現代の主流の農学や医学の枠組みの歴史（それは基本的に身体や自然を生態学的に見ることを不可能にしてきた）も物語調で紹介され、勉強になるし読み物として楽しい。ガーデニングなど、経験に裏つけられたエッセイ風の記述も好感がもてる。

（投稿・犬）

地政学に学ぶ、人間の営みと争いの構図

「地政学」——最近書店に行くくと、この仰々しい三文字がどうも目に付く。地政学が流行するのは、国際情勢がきな臭い時である。

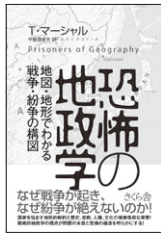
そんな時代にあつて、愚直に平和を唱えることで危機を回避できると考える人もいる。地政学はその逆だ。戦争に備えることでしか、平和は維持できない。評者は基本的に後者に同調するが、地政学は同時に、人間が戦争から逃れられない理由も教えてくれるのではないか？ 今回は初学者のための導入本を紹介しつつ、地政学を単なる軍事戦略ではなく、ある種の「人間学」として描いていきたい。

地政学を学ぶ意味——「地理の囚人」としての人間社会

まず紹介したいのが、ティム・マシーナル著『恐怖の地政学——

地図と地形でわかる戦争・紛争の構図』（さくら舎）である。ただし、この邦題は本書の性格を正確に表していないため、原題を付しておく。Prisoners of Geography——『地理の囚人』といったところか。学問的に深い洞察を施すよりも、世界各地の紛争状況を地理的知識に基づき淡々と記した本書は、次のことを教える。すなわち、いくらテクノロジーが進歩しようとも、人間にとっての地理的制約は決して無効とならない。人間は永遠に「地理の囚人」なのである。

地政学の出発点——人類史の補助線として



ここで古典を一冊。哲学におけるソクラテス、経済学におけるアダム・スミス……あらゆる学問にはその祖とされる人物がいるが、地政学においてはマッキンダーがその人である。『マッキンダーの地政学——デモクラシーの理想と現実』（原書房）を紹介しよう。

今日「地政学」と言えば軍事戦略と結びつけられがちだが、本書の読者はそれが元来人類史を紐解く強力な補助線だったことを知る。マッキンダーは、世界史を人間と地理が織りなす物語として芸術的に描いた。本書はもはや一つの歴史文学とも言つべき名著である。

経済と地政学——人間の営みと争いの源泉

ところで、地政学の祖・マッキンダーが活躍したのは二〇世紀前半、世界が二度の大戦を経験していく時代だった。すなわち、地政学はその始まりから戦争と向き合うための学問だったのである。それにしても人はなぜ戦争をするのだろうか？ 神野正史著『地政学でよくわかる！ 世界の紛争・戦争・経済史』（コスミック出版）、そして宮路秀作著『経済は地理から学べ』（ダイヤモンド社）を紹介しよう。人間社会は自然の恵みによって成り立っているが、その恵み、例えば天然資源の賦存などは地理的に不均一である。近年の紛争史を紐解く前者の書は、そんな資源の不等分分布が各国の生存戦略を介して紛争へと発展していく様を描く。先の太平洋戦争の項を読めば、それが単なる軍部の暴走などではなく、当時の世界経済を所与とした日本の生存戦略だったことが理解されるだろう。そして後者の書においては、今日の世界経済にあっても尚、各国は自らの地理的条件のもと各々の生存戦略を有していることが明らかとなる。すなわち、世界は依然として潜在的紛争状態にあるのだ。

地政学が描く人間像……それは、地理的制約のもと懸命に自らの生活を営む一方、時にそれが不十分であるが故、地理的条件のもと互いに争うちっぽけな存在である。そんな人間の不完全さを自覚すること、そこに地政学を学ぶ意義があるのかもしれない。（いの）

編集後記

「言葉というものは、人々の頭に滲透して限りなく多様な抵抗を受ける電流の様なものだ。この抵抗こそ言葉というものの現実的な意味である。」今回の特集で紹介した「Xへの手紙」のなかで、小林秀雄はこう言っています。本が無数にある以上、読書とはそれ自体すでに奇蹟的な体験ですが、そこで出会われる言葉と内容が知的で感性的な刺激をもたらすなら、これほどの幸せはないでしょう。

さて、本の愉しみ、言葉の豊かさを、私の好きな詩人はこんなふうに表現しています。

「本のページが植物でできているのは不思議だ／ことばの基底材は植物の繊維なのだ」(松浦寿輝『Afterward』思潮社)。太陽エネルギーはやがて電気エネルギーに変換され、どんな新しい世界を産み出すのでしょうか。

今月号より編集委員を務めるにあたり、読書という奇蹟を仲立ちできる喜びをかみしめつつ願うこと、それは、地球の周る音を聴きながら光と闇のくりかえしを呼吸してきた、そんな言葉たちとぶつかり合えますように。そして、私の書き綴る言葉が、多少なりとも電荷を帯びてくれていますように、ということです。よろしく願い致します。(春海)

当てよう! 図書カード

夏至から日にちが経って少しずつ昼間が短くなってきたような気もしますが、さて、京都と札幌で日の出の時刻がほぼ同じになるのは次のうちいつでしょう?

1. 春分
2. 夏至
3. 秋分
4. 冬至

(ねこ)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください(またはe-mail:teiyo@s-coop.net)。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは10月16日です。

5月号の解答

5月号「地球と太陽との距離が最も短いのは何月?」の解答は、1. 一月でした。北半球に住んでいるとちょっと意外に思う答えかもしれませんが。応募者20名中17名の方が正解でした。図書カードの当選者は、がちまいさん、G.A.さん、KURENAIさん、ヨッシーさん、るんさん(順不同)です。おめでとございます。(蔵餅)

読者がらひゅう

○今回の問題、悩みました。よく自転車でするので、こぎやすさから選んでみたつもりです。(農学部・バリ)

——今回の問題は難しかったですね! 個人的には、グーグルで調べてもすぐににはわからない問題を作りたいと常日頃思っているのですが、その典型のようないい問題だったと思います。

○そろそろ純文学が恋しくなってきました。特集も組んでもらえると嬉しいですね。(工学部・たそ)

——最近、小説の書評も増えてきたように思います。僕たちとしても、夏休みは後期の特集を決めていく期間でもありますので、純文学、提案してみますね。

○『知的生産の技術』の評に明らかな誤り(XB6版→XB6判)があった。「書籍」の紹介であるし、厳しいチェックが必要だと思う。(財務部・よっさん)

——ご指摘ありがとうございます。本当に、書籍を相手にする冊子として恥ずべき誤りで恥し入るばかりです。今後、校正に念を入れて一同取り組んで参ります。今後とも綴葉をお願いいたします。(トロ)